

# ワークショップ 映画の誕生を体験 プラキシノスコープを使ったワークショップ

フィルム技術者 郷田 真理子

(文・柿田 秀樹)



一八七七年にフランスのエミール・レイノーが発明したプラキシノスコープは、十二コマの連続した絵を回転させ、そのコマを鏡によって外側に映し出し、動画を楽しむ娯楽技術である。

この技術はしばしば映画の原型とされ、アニメーションの先駆けとされる。今回、プラキシノスコープを使って、実際に連続した絵をその場で参加者が作成し、その描いた絵を大型スクリーンに投影するワークショップを行った。当日は学内外からの参加者が集い、ワークショップを開催した。

全体を三つのパートに分けて、ワークショップを進めた。最初にプラキシノスコープの歴史と仕組みを講師が解説した。解説では、プラキシノスコープが発明された十九世紀以前の映像技術であるファンタスマゴリア等の映像技術と共に、この歴史的な視覚技術が紹介された。次に、参加者が実際

にプラキシノスコープで投影する為の十二コマの映像を作成した。参加者は十二コマの分割を入れた細長い紙に絵を描き入れて、映写の準備をした。最後に、参加者が描いた絵をプラキシノスコープに載せてスクリーンに投影した。その際、ピアノの柳下恵美さんがそれぞれの絵にあわせた伴奏をつけて下さった。

ワークショップの締め括りとして、古い映写機を使った映像投影に参加者に体験してもらった。最新のデジタル技術を駆使した映像とは異なる趣があるフィルムの映像体験が多くの人に手触りの印象を残すことができたはずである。



フィルム技術者。株式会社 I M A G E A ウェストフィルムプロダクション勤務。NPO法人映画保存協会の活動。小型映画関係の仕事を経たのち、五年間東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館でフィルムの調査に従事。二〇一四年より現職。その他の活動に「プラキシノスコープ」など映像玩具を使ったワークショップ講師。「ホームムービーの日」上映会(相模原・大阪・新世界会場)の世話人など。